

ハロルド・チャイルドについて

水田 圭子

「キャサリン・マンスフィールドの『詩集』」(‘Katherine Mansfield’s Poems’) という特色ある書評が1923年12月20日付けの『タイムズ・リテラリー・サブプリメント』(*Times Literary Supplement*, No. 1144 (Twenty-Second Year)), p. 892に掲載された。これは題名からも明らかのように、マンスフィールドの『詩集』(*Poems* (1923)) 評であるが、匿名で公表されていたために文章の書き手は必ずしも明らかでなかった。そして今日まで長らく、著名な詩人、小説家、批評家のウォルター・デ・ラ・メアの作とされてきたのだが、前号(『英米学研究』第32号)で、評者はデ・ラ・メアではなく、ハロルド・チャイルドという作家、批評家であることを述べた。今回は、このハロルド・チャイルドという人物について紹介したい。

ハロルド・ハンニントン・チャイルド(Harold Hannington Child(1869-1945))は『英国人名辞典』(*The Dictionary of National Biography* (1941-1950)) (略称DNB)によると、トマス・ハンニントン・アーヴィング・チャイルド(Thomas Hannington Irving Child)という牧師の父と、弁護士(ソリシター)の娘である母、フローレンス(Florence)との間の、次男として、グロスター(Gloucester)で生まれた。オックスフォード大学に進み、2つの学寮の特待生となった。1892年人文学で二番の成績でB. A.を取った後は、法律家の道へ入ったが、2年でやめて、俳優として舞台に立つようになった。が、それも長くは続かなかった。

彼は俳優を廃業する前から、作家活動を始めていた。『ザ・スター』(*The Star*)に短篇のシリーズを寄稿した他、最初の本、『荒野のフィル』

(*Phil of the Heath*, 1899) を刊行した。これは選挙法改正法案時代のロマンティックな小説である。彼は生来文人的な気質を持っていたようであったが、ジャーナリストとしても活発にペンを進め、その分野の仕事も軽んずることはなかった。1905年から1910年の間はずっと『アカデミー』(*The Academy*) と『バーリントン・マガジン』(*The Burlington Magazine*) の副編集長を務め、1912年から1920年までは『シ・オブザーヴァー』(*The Observer*) の劇評家として活躍した。一方、旧友のブルース・リトルトン・リッチモンド(卿)((Sir) Bruce Lyttelton Richmond) と一緒に『タイムズ・リテラリー・サプリメント』を出すことになり、それは1902年に創刊された。この『タイムズ〜』に40年間に渡って才気あふれる充実した内容の評論を寄稿した。初期の段階からこうした評論の質の高さを認められてチャイルドは、『ケンブリッジ英文学史』(*The Cambridge History of English Literature* (以下*History*と略す)) のために幾章かを書くように勧められてもいた。この幾章かで扱われた内容は極めて広範囲にわたり、実に深い共感と学識をもって詩人のクラブ(Crabbe)、小説家ジェイン・オースティン(Jane Austen) について書くことができた。

それに劣らず、彼はまた、エリザベス朝を初めとするあらゆる時代の演劇にも特別な興味を持ち続けていた。長年に渡り、『ザ・タイムズ』(*The Times*) の劇評をエー・ビー・ウォークリ(A. B. Walkley) と共に担当した。彼は、実際に舞台に立った経験があるので、脚本家の仕事だけでなく、演出家と俳優の仕事も理解できた。特に、シェイクスピアの上演では、権威ある歴史学者として次第に地位を確立した。アーサー・クイラー・クーチ卿(Sir Arthur Quiller-Couch) とジョン・ドーヴァー・ウィルソン教授(Professor John Dover Wilson) の編集による『ニュー・シェイクスピア』('The New Shakespeare') の各巻には彼の手になる上演史が掲載された。それは、このシリーズの完結を待たずに彼が死亡する

まで続いた。実際、手元にある同シリーズの『ハムレット』(Hamlet)に掲載されているチャイルドの上演史は詳細を極めた見事なものである。

演劇に加えて、チャイルドが深い興味を持ったのは、詩、音楽、美術であった。彼は1902年から1905年まで画家兼腐食銅版製作者及び彫版師の王立協会の幹事をしたり、ディーミエ(Dimier)の『十六世紀のフランス絵画』(*French Painting in the Sixteenth Century*)の翻訳を手がけたりした。また、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)に関する著作や、ラルフ・ヴォーン・ウィリアムズ(Ralph Vaughan Williams)(1872-1958; 英国の作曲家)の『家畜商人・ヒュー』(*Hugh the Drover*)の台本を創り、さらには『イエロー・ロック』(*The Yellow Rock*, 1919)という恋愛詩まで書いた。しかし彼のエネルギーの大部分は『ザ・タイムズ』にむけられていた。文芸評、劇評に加えて、彼は、特別な記事、「一般向け記事」の寄稿者としてもきわめて信頼されており、これらの抜粋が『評論と考察集』(*Essays and Reflections*, 1948)に収められている。彼の周辺は毎日忙しかったと察せられるが、彼は決して自らの評論の質を下げなかった。『愛と無情』(*Love and Unlove*, 1921)という題名で出版された評論集には「幸福とは、消極的に排除する事ではなく、積極的にますます取り入れて行くことである」という彼独自の人生観が明らかにされている。彼は喘息の再発に悩まされながらも、快活で皆に好かれた。健康が衰えても、またロンドンの彼のアパートが爆撃されても、精神的価値を信じる彼の気力は健全さを失わなかった。

チャイルドは1896年ドルシラ・メアリ(Drusilla Mary, 1918年死亡)と結婚した。彼女は、女優のケイト・カットラー(Kate Cutler, 1870-1955)の妹である。この最初の妻の死後1934年にエイッチ・スペンサー・ウィルキンソン(H. Spenser Wilkinson)の娘ヘレン・メアリ(Helen Mary)と再婚した。いずれの結婚においても子供には恵まれなかったが、かわりに永遠の生命を持つ豊かな著作を残して、ハロルド・チャイルド

は1945年11月8日、リトルハンプトン (Littlehampton) で亡くなった。

以上がDNBの伝記の内容である。チャイルドが亡くなった2日後、『ザ・タイムズ』の1945年11月10日付けに「ハロルド・チャイルド氏 称賛」(‘Mr. Harold Child / An Appreciation’) という記事が載せられた。冒頭、ハロルド・チャイルドは、ホラティウスの言葉——「気品ある簡潔さ」(*simplex munditiis* : simple in elegance) に値する人であると述べられている。彼の文体の簡潔さは運動選手の四肢を連想させるものだが、同時に適度の色彩感や、感性や、学問的言及も含まれている。ジャーナリストや文学を目指す人のお手本であると述べられている。一方彼の著作の真髄を考えると、彼の中には学問をひけらかさない学者の完璧な例が見出だせる。彼は、芸術や詩の精妙さを鋭敏な鑑識眼で理解することができた。目の前にある作品が、しっかりと根の生えているものか、あるいは、いかに華麗であっても、浅い土に生えた雑草であるかを区別することができた。

最後に、1945年11月9日付けの『ザ・タイムズ』に掲載された「訃報」(‘Obituary’) を紹介しよう。これは「ハロルド・チャイルド氏 文学、学問、そして『ザ・タイムズ』」(‘Mr. Harold Child / Letters, Scholarship, and “The Times”’) と題され、『ザ・タイムズ』の論説委員を長年勤めたハロルド・チャイルド氏が、リトルハンプトンの聖フローラズ街 (St. Flora’s Road, Littlehampton) で、76歳で昨日亡くなったという書き出しで始まっている。彼は死の数週間前まで筆を捨てることはなかった。最後の数年間は喘息がひどくなっていたが、彼は病魔に屈せず、最後まで情熱を持って密度の高い文章を書いた。身体はかなり長い間強健ではなかったが、大いなる勇気と決断をもって乗り越えた。彼は自分の仕事を良心的に熱心に実行した。仕事故に彼は心の平静さを失うこともなく、同僚たちからも、慕われ、敬われていたと記されている。

それに続いて写真が入り、先に引用したDNBの内容と同様の詳しい伝

記が付されている。チャイルドは、この*DNB*にも執筆をしている。また「訃報」には、チャイルドが英文学全般に精通していた事を示した*History*への寄稿のきっかけとなるエピソードが明かされている。*History*の出版の計画がなされていた時、ピーターハウス学寮の寮長であったエー・ダブリュ・ウォード (A. W. Ward) は『タイムズ』の編集長に、同誌からの10編ほどの記事を同封し、彼とジョージ・ウォルター・プロザロ (George Walter Prothero) が寄稿者をさがしていること、また同封した記事の作者を教えてもらえるなら、その人達の間から新人を一人二人見つけられるかもしれないという旨の手紙を送った。同封されてきた記事は、二編以外はすべてチャイルドの書いたものであった。他の寄稿者は既に名前の通っている人達ばかりであり、その中で、チャイルド一人が無名という大抜擢であった。また彼は『ケンブリッジ近代史』(*Cambridge Modern History*)ではミルトン (Milton) とその時代について書いている。

チャイルドの出版された本は、必ずしも多くはなく、彼の最高の出来と思われる書き物は大部分匿名のものであり、『ザ・タイムズ』と『タイムズ』のファイルの中に収められている。

以上*DNB*、『ザ・タイムズ』11月9日、10日付けのそれぞれの記事の内容を紹介した。マンスフィールドの『詩集』への好意的な書評もやはり匿名で書かれたもので、チャイルドの鋭い洞察力が光る真摯な書評は、『詩集』の価値を認めた貴重な資料である。こうしたチャイルドのような匿名作家の功績に、もっと光が当てられるべきであろう。

最後に、手元にある資料によると、マンスフィールドの‘A Fairy Story’が掲載された『開かれた窓』(*The Open Window, The First Volume* October–March 1910–11) にチャイルドの『四十男』(‘The Man of Forty’), また*The Second Volume* (April–September 1911) の方には『森の中で』(‘In the Forest’) が収められている。それぞれ、知的で

軽妙な読み物である。これらについては、いずれまた稿を改めて紹介することにしよう。